

〈教育実践研究〉

幼児期における歌唱の導入方法に関する研究

－鳥取市内の幼稚園の事例から－

土井田千紘・鈴木慎一郎

Investigation of the Introduction of Singing in Infancy

:A Case Study on Kindergarten in Tottori City

DOITA Chihiro, SUZUKI Shinichiro

キーワード：歌唱，導入，幼稚園，質問紙調査，観察調査

Key words : singing, introduction, kindergarten, survey, observation

はじめに

幼児期の子どもの音楽表現活動は、その子どもを取り巻く環境や子ども同士の関わり、養育者や保育者などの働きかけによりさまざまな影響を受けている。幼児教育においては、特に人的環境とされる保育者の与える影響は大きいと考えられる。さらに音楽表現活動の中でも、歌唱活動は自分の声だけで表現することができ、幼児期の子どもでも表現しやすい方法である。一方、小学生以上の子どもにおける歌唱活動は、教師が教科書を基に指導できるため、子どもは文字や楽譜を見ながら歌唱を習得していくという方法を採用することができる。しかし、幼児教育において教科書は存在しておらず、楽譜を見て歌うという方法を採用することは難しい。これらのことから、幼児期の子どもにおける歌唱活動において、子どもが歌唱に興味・関心をもち、歌唱を習得するためにはどのような方法があるのだろうかという疑問を抱いた。さらに歌唱活動の前に行われる、保育者によるお話や手遊び等の「導入」に影響を受けて、子どもがどのように歌唱を楽しみ、歌っていくのかについて調査したいと考えた。

以上により、本稿の目的は、幼児が新たに歌唱を習得する際の保育者による導入方法の種類、ならびにその導入方法により幼児が歌唱を獲得していく実践場面の実態を明らかにすることである。事例としては、声域が安定すると思われる、3歳児から5歳児を対象とするため、幼稚園に限定して進めていくこととする。

先行研究に関しては、「①子どもの声に関する研究」と「②音楽表現と環境との関係性に関する研究」と「③歌唱の導入方法に関する研究」に分けて検討を行った。①に関しては、米山文明(1998)¹、梅本堯夫(1999)²、小川容子(2008)³が挙げられる。②に関しては、今川恭子(2006, 2008)⁴、矢部朋子(2011)⁵、志民一成・石川眞佐江・中村かおり(2012)⁶が挙げられる。③に関しては、武田道子(1979)⁷、長野麻子(2009)⁸、石田久大(2009)⁹、滝口圭子・迫田里沙(2012)¹⁰が挙げられる。これらの研究では、実験や事例に基づき、詳細な分析、考察がなされ、個々の成果は明らかにされている。しかしながら、特定の都市の全幼稚園を対象とした歌唱活動の導入に着目した実態調査に基づいた総体的な研究は見当たらない。

そこで研究方法としては、第一に、鳥取市内の幼稚園を対象とした歌唱の導入方法に関する質問紙調査を実施する。第二に、幼稚園で行われている歌唱の導入場面に関する観察調査を行

い、実態を明らかにする。

1. 新しく歌唱を獲得する際の導入方法に関する質問紙調査

(1) 調査方法

1) 目的

本調査は、子どもが新しく歌唱を獲得する際に、子どもたちが歌唱のメロディーやリズムを習得したり、歌唱に興味・関心をもてるようにしたりするためにどのような取り組みをしているかについて、質問紙調査を行い、歌唱の導入方法について検討することを目的とする。

2) 日時

2014（平成 26）年 2 月から 3 月にかけて実施した。

3) 対象

鳥取市内の全幼稚園 13 園（国立 1 園，私立 12 園）である（2014 年 2 月時点）。

4) 手続き

質問紙を幼稚園に郵送し、クラス担任など教職員の方に回答してもらい、その後各園で返信用封筒にまとめて返送してもらう、という手順で行った。事前に担任数が確認できた園には人数分の質問紙を郵送し、確認できなかった 1 園には、定員規模に合わせて設定した部数を郵送した。郵送した質問紙は、全部で 103 通である。回収率は 7 割を見込んだ。質問項目としては、子どもが新しく歌唱を獲得する際の導入方法として行っていることについて、歌のメロディーやリズムを習得するための方法と、歌に対して興味・関心をもてるようにする方法の 2 つに分けて問うた。また、担任しているクラスの年齢と人数について問う項目も設けた。調査の結果、13 園中 11 園，75 名からの回答を得た。実際に分析に用いたものは 71 名分である（75 名中 4 名には、複数回答があったため、分析を行っていない）。103 通を分母とする回収率は 72.8%，園数での回収率は 84.6%であった。

(2) 結果及び考察

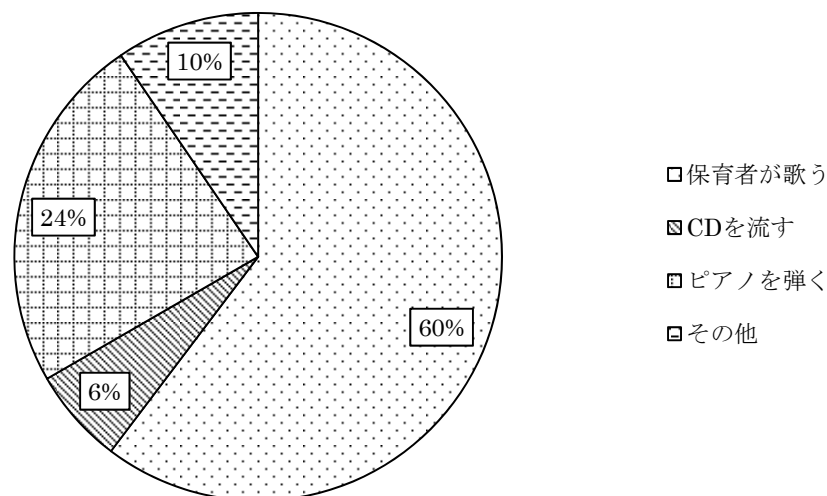


図 1 「子どもたちが歌のメロディーやリズムなどを習得するための方法」調査結果

図1は、子どもが新しく歌唱を獲得する際に、メロディーやリズムなどを習得するための導入方法について質問した結果をまとめたものである。

「保育者が歌う」が60%、「CDを流す」が6%、「ピアノを弾く」が24%、「その他」が10%であった。「その他」に関しては、「弾き歌い」や「CDをかけながら歌う」という回答が見られた。

図1から、「保育者が歌う」が半数以上を占めており、「その他」に関しても「弾き歌い」などの回答があったことから、メロディーやリズムなどを習得するための導入方法として、範唱という方法を行っている保育者が多いということがいえる。

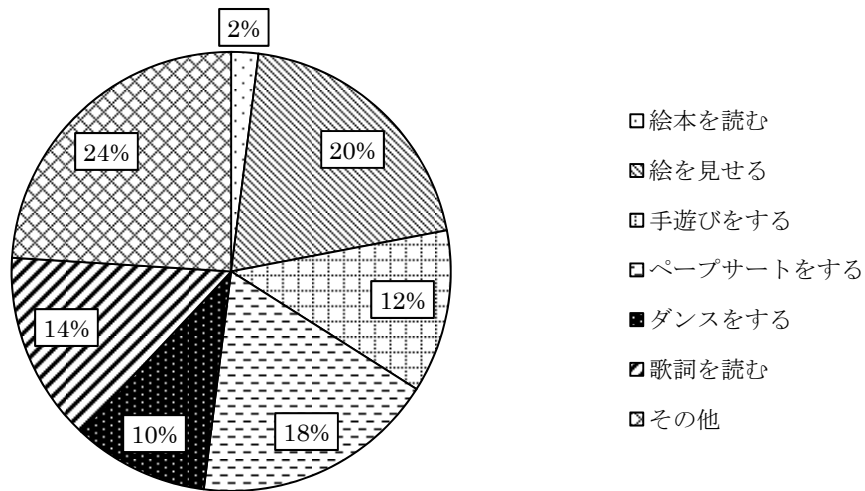


図2 「子どもたちが新しい歌に対して興味・関心をもてるような方法」調査結果

図2は子どもが新しい歌に対して興味・関心をもてるようにするためにどのような導入方法を行うかについて質問した結果をまとめたものである。

「絵本を読む」が2%、「絵を見せる」が20%、「手遊びをする」が12%、「ペープサートをする」が18%、「ダンスをする」が10%、「歌詞を読む」が14%、「その他」が24%であった。

「その他」に関しては、「歌詞カードを貼る」、「歌のイメージがわくような話をする」、「CDを繰り返し流す」、「保育者が歌ってみる」などの回答があった。

図2から、その他を除くと、「絵を見せる」という回答が一番多く、その次に「ペープサートをする」が多いことがわかる。この2つの回答の共通点として、絵を使って視覚的に働きかけるといふ点が挙げられる。また、「絵本を読む」も含めると、絵を使って視覚的に働きかけるものが全体の40%を占めている。以上のことより、子どもが新しい歌に対して興味・関心をもてるような導入方法として、絵という視覚的なものを使った方法を行っている保育者が多いことがいえる。

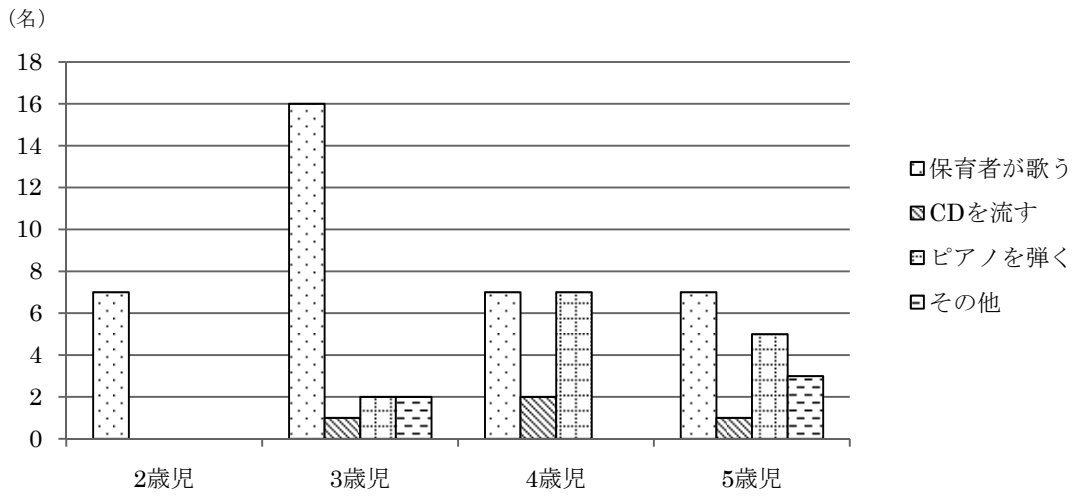


図3 メロディーやリズムを習得するための方法の年齢による比較

図3は、子どもが新しく歌唱を獲得する際に、メロディーやリズムなどを習得するための導入方法について質問した結果を年齢別に比較してまとめたものである。

2歳児では「保育者が歌う」が7名、3歳児では「保育者が歌う」が16名、「CDを流す」が1名、「ピアノを弾く」「その他」が各2名、4歳児では「保育者が歌う」が7名、「CDを流す」が2名、「ピアノを弾く」が7名、5歳児では「保育者が歌う」7名、「CDを流す」が1名、「ピアノを弾く」5名、「その他」が3名という結果であった。

図3から、2歳児、3歳児では「保育者が歌う」という回答が多いことがわかる。それに比べて、4歳児、5歳児では「ピアノを弾く」という方法を行っている保育者が、2歳児や3歳児よりも多いことがわかる。これらのことから、年齢が低いほど、メロディーやリズムを習得するための方法として、範唱という方法をとっている保育者が多いことがいえる。

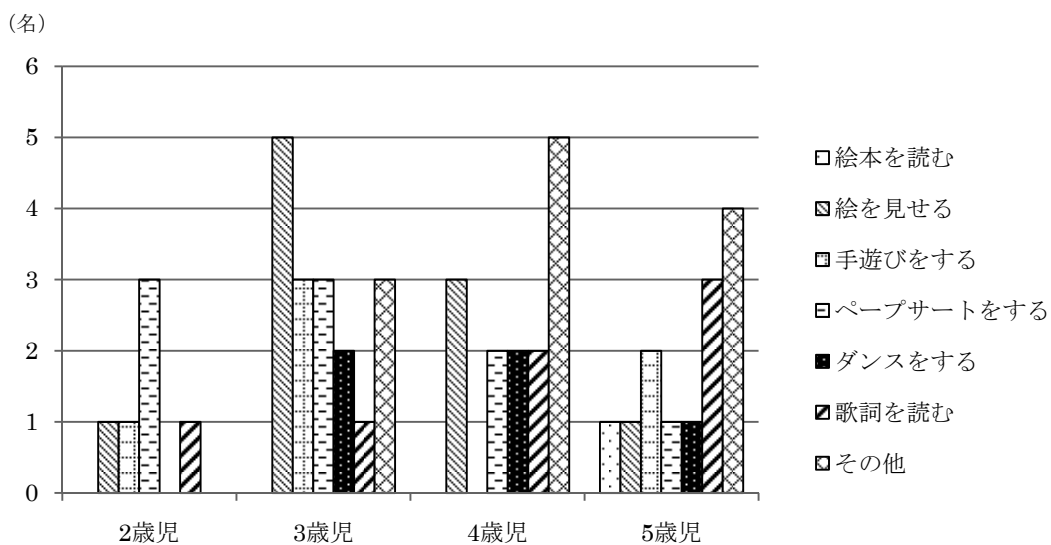


図4 新しい歌に対して興味・関心がもてるような方法の年齢による比較

図4は、子どもが新しい歌に対して興味・関心をもてるようにするためにどのような導入方法を行うかについて質問した結果を年齢別に比較してまとめたものである。

各年齢で一番多い回答は、2歳児では「ペープサートをする」が3名、3歳児では「絵を見せる」が5名、4歳児では「その他」が5名、5歳児では「その他」が4名という結果であった。4歳児の「その他」の内容に関しては、「CDを繰り返し流す」、「友だちや保育者と楽しい雰囲気の中で聴いたり、歌ったりする」、「歌詞カードを貼っておく」、「歌の歌詞をお話のように読む」などの回答があった。5歳児の「その他」に関しては、「天候や行事の話をする」、「歌詞を見えるところに貼る」、「曲のイメージがわくような話をする」などの回答があった。

図4から、2歳児、3歳児では「絵を見せる」、「ペープサートをする」といった、絵を使って視覚的に働きかけるものが多いことがわかる。それに対して、5歳児では、「歌詞を読む」の回答が3名あり、その他の内容にも、歌詞を貼ることや、話をするのが回答として出ていることから、文字や言葉を使って働きかける方法が2歳児や3歳児に比べて増えていることがわかる。このことから、年齢が高くなると、絵を使って視覚的に働きかける方法から、文字や言葉を使って働きかける方法をとる保育者が多くなるということがいえる。

(3) まとめ

ここまで、各質問項目についてその結果と年齢との関係性について示してきた。ここでは、これらの結果及び考察から、歌唱の導入方法の実態についてまとめていくこととする。

本調査において、子どもたちが歌のメロディーやリズムを習得するための方法として、範唱という方法を行っている保育者が多く、特に2歳児、3歳児といった年齢の低い子どもについて、その傾向が強いことが明らかになった。また、子どもたちが新しい歌に対して興味・関心をもてるような方法に関しては、絵本や絵、ペープサートといった、絵を使って視覚的に働きかける方法をとっている保育者が多く、5歳児など年齢が高くなると、絵だけではなく、文字や言葉を使って働きかける方法を行っている保育者が多くなっていることが明らかになった。

これらのことから、範唱という方法により、保育者の声を聴くことで、子どもがメロディーやリズムを習得しやすいのではないかと考えられる。さらに、絵やペープサートを使ったり、5歳児など年齢の高い子どもについては、歌詞を読んだり、歌詞を書いた模造紙等を貼ったりするという導入を行うことで、新しく扱う歌に対して興味・関心をもって、歌唱活動に取り組むことができるのではないかと考察される。

2. 新しく歌唱を獲得する際の導入方法に関する観察調査

前述の質問紙調査の結果、歌唱の導入方法に関して、メロディーやリズムを習得するための方法として範唱を、興味・関心をもてるような方法として絵を使って視覚的に働きかける方法を行っている保育者が多いことが明らかとなった。ここでは、上記の点について、観察調査を通して検討していきたい。

(1) 調査方法

1) 目的

本調査は、実際に幼稚園で行われている歌唱活動を観察することにより、歌唱の導入方法と子どもがどのように歌唱を獲得していくのかということについて検討することである。

2) 日時

2014（平成 26）年 9 月 30 日に実施した。

3) 対象

鳥取市内私立 T 幼稚園の 3 歳児クラスにて実施した。前述の質問紙調査で、範唱や絵を使って視覚的に働きかける方法をとっている保育者が比較的多かった園である。

4) 手続き

幼稚園での歌唱活動の中で、新しく歌唱を扱うときに限定をし、実際に担任の教諭が子どもたちに、本調査で扱われた楽曲の《くり くり くり》（作詞：飯島敏子，作曲：池田富造）を教えているところを観察した。歌唱活動には参加せず、保育室の端の方で記録をとる、消極的な参与という形で調査を行った。

記録方法は、ビデオカメラによる記録と、筆者の土井田が活動を実際に目で見てメモをとったフィールドノートによる記録の 2 つである。ビデオカメラによる記録は、前方と後方の 2 方向から、主に子どもの様子を記録するものが 1 台、全体及び保育者の様子を記録するものが 1 台の計 2 台で行った。後日、テープ起こしを行い、文字化されたトランスクリプトを作成した。

(2) 結果及び考察

ここでは、トランスクリプトから実物やペープサートを使った視覚的援助の行われている場面、範唱の場面、保育者と子どもと一緒に歌っている場面、動作をつけて歌っている場面を取り上げ、それぞれの場面について詳しく述べていくこととする。

表 1 子どもたちがいが付きの栗を見たり、触ったりしたときの様子

時間	保育者	子ども
01:37	「じゃんじゃんじゃーん。」 (いが付きで緑色の栗を、ペープサートと一緒に見せる)	「栗！」
	「これなーんだ？」	「栗！」(多数)
01:41	「栗？ほんと？栗って知ってた？」	
01:46	「栗のこれなんでしょう？」(いがを指さす)	
01:49		「痛い。痛い。」(何人か)
01:50	「痛い？」	
01:53	「痛いかどうかちょっと触ってみて。」	
01:55	(栗をもって子どもたちが触れるようにまわっていく)	(ひとりずつ、栗のいがを触っていく) 「痛い。」(一人一人)
01:59		「触ってみたい。」(1人)

表 1 は、保育者がいがの付いた栗を見せ、子どもたちがそれを見たり、触ったりしている場面である。実際に栗を見る前に、保育者がこの日扱う歌唱の中には、秋の食べ物が出てくることを子どもたちに伝えており、子どもたちはペープサートなどを見たり、ヒントを聞いたりして、その食べ物は何かということを発言している。

この場面において、子どもたちは栗を見て、保育者に「これなーんだ？」と聞かれた際に、多くの子どもたちが「栗！」と大きな声で発言している。また、一人一人が触っていくときにも、1 人の子どもが「触ってみたい。」と発言している。「触ってみたい。」と発言した子どもは

1人であったが、友だちが触っている様子をじっと見ている子どもの姿は多く見られた。これらのことから、この場面において、子どもたちは栗を触ってみたい、見てみたいという気持ちが強く、栗に興味をもっているのではないかと考えられる。

表2 子どもたちが栗の実を見たときの様子

時間	保育者	子ども
03:09	「栗のおいしい秋の果物で、実はこのね、栗さんね、ちょっと今恥ずかしくって、中、かくれんぼしてるんだけど、このとげとげの、中にはじつは・・・」 (栗の実が入ったカゴを取りに行く)	
03:32		「栗。」(何人かがばらばらに)
03:34	「これは開けれなかったんだけどね・・・」	
03:37	「じゃーん！」 (カゴの中身を子どもたちに見せる)	
03:40	(一人一人の子どもの前にカゴを持っていき、中を見せる)	「わあー。」(多数)
03:45		「栗。」(何人か)

表2は、表1で示した栗のいがを触ったあとに、栗の実を保育者が提示し、それを子どもたちが見たときの様子である。

多くの子どもたちが栗の実を見た瞬間に「わあー。」と発言をしている。この前の段階で見ていた、いがの付いた栗からの変化があったことで、子どもたちは栗の実に興味を示しているのではないかと考えられる。また、表1の場面と同様に、実際に栗を見たことが、栗への興味をもつことへつながっていると思われる。

表3 保育者がペープサートを使って話をしているときの様子

時間	保育者	子ども
04:03	「ほんと言うとね、とげとげさんの中から・・・」	
04:10	(ペープサートを見せながら)「こんなふう に、この栗がパカッって開くと、中から、 だいたいこんなふうには、栗が出てきたの。」	「えー！」(1人) (多くの子どもがペープサートを身を乗り出すようにして見ている)

表3は、保育者がそれまでも何度か見せていたペープサートを使って話をしており、ペープサートの仕掛けが出てきたときの様子である。ここまでに子どもたちは、栗のいがや実を見たり、触ったりしており、保育者の話の中でいがの中に実が入っていることを聞いている。

保育者がペープサートの仕掛けを見せたときに、1人の子どもが「えー！」と発言している。その他にも多くの子どもたちが、ペープサートを身を乗り出すようにして見ている。このことから、子どもたちは栗のペープサートへ興味をもっていると考えられる。

表 4 保育者が歌っているときの様子

時間	保育者	子ども
05:51	【とげとげぬぐと ちゃいろのようふくだあれ くーりくりくり くーりくりくり こんにちは くりくりくり】(ピアノを弾きながら)	(何人か保育者の歌に合わせて口ずさんでいる)

表 4 は、保育者が子どもたちの前で、ピアノを弾きながら 1 番を通して歌っているときの様子である。1 番を通して歌う前に、保育者は少ずつ歌詞を確認しながら歌っている。

保育者が歌っている際に何人かの子どもが、保育者の歌に合わせて口ずさんでいる。また、1 番を通して歌う前に、少ずつ歌っていた際にも、口ずさんでいたり、歌に合わせて足を揺らしたりしている子どもたちが何人か見られた。このことから、保育者の歌を聞いて、子どもたちが歌ってみようという意欲をもち、メロディーやリズムなどを習得しつつあるではないかと考えられる。

表 5 保育者と子どもたちが一緒に歌っているときの様子

時間	保育者	子ども
07:18	(前奏を弾き始める)	(前奏に合わせて首を動かしたり、【くりくり】と歌ったりしている)
07:24	「どうぞ。」	
07:26	【とげとげぬぐと ちゃいろのようふくだあれ くーりくりくり くーりくりくり】(ピアノを弾きながら)	(最初は【くりくり】と歌う子どもが多いが、少ずつ保育者の歌に合わせて正しい歌詞で歌い始める) (【くりくりくり】など歌詞の中に「くり」が入っているところで声が大きくなる)

表 5 は、一度保育者と子どもが一緒に歌った後、保育者が次は大きな声で歌ってみようと呼かけを行い、もう一度歌っているときの様子である。

前奏を弾き始めた時点で、子どもたちは前奏に合わせて「くりくり」と歌っている。同じような子どもの姿が、保育者のみが歌っている場面でも見られた。歌い始めた際には、「とげとげ」の部分を「くりくり」と歌うなど歌詞が曖昧な子どもが多く見られた。しかし、歌っていく中で徐々に歌詞を覚え始め、「だあれ」のところから本来の歌詞で歌える子どもの姿が見られるようになった。さらに、歌詞の中で、「くり」という言葉がある部分に関しては、全体的に声が大きくなっている。この場面から、歌詞の中で何度も出てくる言葉から子どもたちは覚えていると考えられる。歌詞の中で何度も出てくることに加え、それまでにペープサートや栗そのものを見ていることも、影響を与えているのではないかと考える。

表 6 動作をつけて歌っているときの様子

時間	保育者	子ども
09:47	「どうぞ、とげとげできる」	
09:49	【とげとげぬぐと ちゃいろのようふくだあれ くーりくりくり】	(声は小さいが、歌いながら動作をする)
	(ピアノを弾きながら)	(初めは動いていなかった子どもも動いている子どもを見て動き始める)

10:01	(手拍子を4回する)	
10:04	【くーりくりくり】(ピアノを弾きながら)	
10:06	(手拍子を4回する)	
10:07	「最初、ごあいさつだね」	
10:09	【こんにちは】(おじぎをしながら)	(【こんにちは】に合わせておじぎをする)
10:13	【くりくりくり】(ピアノを弾きながら)	(少し遅れて、手拍子をする)

表6は、動作をつけながら、1番を通して歌っているときの様子を示したものである。この前の場面で、保育者が前で動作をつけながら少しずつ歌い、それを子どもたちが真似をしていくという活動が行われている。

動作をつけながら歌うという活動になった際に、それまで歌うだけのときには口が動いていなかった子どもが、動作をつけたことにより歌い始めるという姿が見られた。初めは動いていなかった子どもも、友だちの様子を見て動き始めている。このことから、動作をつけることにより、歌うだけではあまり興味をもつことができなかつた子どもも、歌唱に興味をもつことができるのではないかと考える。

(3) まとめ

ここまで、観察調査で見られた6つの場面を取り上げ、述べてきたが、ここではこれらの結果及び考察を踏まえた上で、歌唱の導入方法と子どもが歌唱を獲得していく過程についてまとめていく。

本調査で行われた歌唱の導入方法として、栗を見せる、ペープサートを見せる、歌う、動作をつけながら歌うの4つが挙げられる。まず、栗という実物を見せていた場面では、子どもたちが栗というものに興味を示しているような言動が見られた。このことから、実物を見るのが歌唱への興味につながると考えられる。

ペープサートを見せていた場面に関しても、子どもたちは栗のペープサートに興味をもっているような姿が見られた。質問紙調査により、ペープサートなど絵を使って視覚的に働きかける方法を行う保育者が多いことが明らかとなっている。このことから、絵を使った視覚的な援助により、子どもたちは歌唱への興味をもつことができるのではないかと考えた。本調査においても、質問紙調査と同様に、絵を使って視覚的に働きかける方法が、子どもたちが歌唱への興味をもつことへつながるといえる。

歌うという方法に関しては、保育者のみが歌った場合は、何人かの子どもたちが保育者の歌に合わせて口ずさんでいる様子が見られた。その後、一緒に歌う活動に入った際には、子どもたちは歌詞を少しずつ覚えてきており、特に歌詞の中に「くり」という言葉が出てくるところは声が大きくなり、積極的に歌っている様子であった。質問紙調査の結果から、保育者が歌うことにより、子どもたちは歌唱にメロディーやリズムを習得しやすいのではないかと考察したが、本調査においても同様のことがいえると考えられる。

動作をつけて歌っている際には、それまで歌っていなかった子どもが、動作をつけたときに口ずさみ始めた様子が観察された。このことから、動作をつけて歌うという方法を取り入れることにより、子どもが歌唱に興味をもって活動に参加できるのではないかと考える。

以上のことから、導入方法として、質問紙調査の結果から得られた、範唱と絵を使って視覚的に働きかける方法に加えて、歌唱の中に出てくるものの実物を提示したり、動作をつけなが

ら歌唱を歌ったりする方法を行うことで、子どもが歌唱への興味をもち歌唱活動に取り組むことができた。さらに、保育者の歌を聞くことにより歌唱のメロディーやリズムを習得し、子ども自身が歌うという行動に移ることが可能となった。

おわりに

「1.」の質問紙調査では、幼稚園で行われている歌唱の導入方法に関する実態について明らかにした。質問紙調査により、歌唱のメロディーやリズムなどを習得するための方法として「保育者が歌う」という回答が60%あり、その他に関しても「弾き歌い」などの回答があったことから、範唱という方法を行っている保育者が多いという結果を得ることができた。さらに、歌唱に興味・関心をもつための方法として、「絵を見せる」が20%、「ペープサートをする」が18%と多く、「絵本を読む」の2%も加えると、絵を使った視覚的援助を行っている保育者が40%を占めているという結果が得られた。これらの結果から、範唱と絵を使った視覚的援助が、歌唱の導入場面で子どもたちが歌唱を獲得するために効果的な方法ではないかと考えられる。

「2.」の観察調査では、幼稚園で実際に行われている歌唱の導入場面を観察し、導入方法と子どもたちが歌唱を獲得していく様子について明らかにした。子どもたちが栗のペープサートや実物を見た際に、それらに興味をもっているような言動が見られた。保育者の範唱を聴いている際には、全員ではないものの、何人か口ずさんでいる子どもの姿も見ることができた。また、動作をつけながら歌う活動に入ると、それまで歌っているような様子が見られなかった子どもが、活動に参加し始める姿も見られた。これらのことから、「1.」で得られた絵を使った視覚的援助に加え、観察調査では歌唱に関連する実物を提示する方法及び動作をつけながら歌う方法により、子どもたちが歌唱に興味をもって活動に参加することができたという結果を得た。さらに、範唱を行うことで歌唱のメロディーやリズムを習得し、子ども自身が歌う活動に無理なく移れるということが明らかとなった。

ところで、質問紙調査での「子どもたちが新しい歌に対して興味・関心をもてるような方法」（図2）として、「その他」が24%を占め、その中には「歌のイメージがわくような話をする」も含まれていた。本稿では「視覚的表現」に焦点を当てて考察してきたけれども、今後は「物語的表現」の有効性についても検証していきたい。さらには、導入後の子どもの音楽表現にも視野を広げて実践研究を続けていきたい。

<謝辞>

本稿を作成するにあたり、鳥取市内の幼稚園から調査の協力を得ました。ここに記して、感謝の意を表します。

<付記>

本稿は、2014（平成26）年度鳥取大学地域学部卒業論文「幼児期における歌唱の導入方法に関する研究：幼児が新しく歌唱を獲得する場面に着目して」の一部である。

土井田千紘（修立幼稚園）

鈴木慎一郎（鳥取大学地域学部地域教育学科）

<注>

- 1 米山文明『声と日本人』平凡社，1998年，pp.86-87。
- 2 梅本堯夫『子どもと音楽』東京大学出版会，1999年，pp.30-38。
- 3 小川容子「子どもの「声」を考える」小川容子・今川恭子編『音楽する子どもをつかまえたい：実験者とフィールドワーカーの対話』ふくろう出版，2008年，p.84。
- 4 今川恭子「表現を育む保育環境：音を介した表現の芽ばえの地図」『保育学研究』第44巻第2号，日本保育学会，2006年，pp.60-70。
今川恭子「音声表現の発達を支えるもの：身体・かかわり・イメージ」小川容子・今川恭子編『音楽する子どもをつかまえたい：実験者とフィールドワーカーの対話』ふくろう出版，2008年，p.106。
- 5 矢部朋子「幼児の遊びにみられる音楽的表現の共有過程」『保育学研究』第49巻第2号，日本保育学会，2011年，pp.52-60。
- 6 志民一成・石川眞佐江・中村かおり「幼児の声の技能を引き出す歌唱実践の試み：静岡大学教育学部附属幼稚園における実践の検討」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第43号，静岡大学，2012年，pp.223-234。
- 7 武田道子「幼児の歌唱指導：導入時におけるつまづきとその治療」『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第11号，静岡大学，1979年，pp.119-130。
- 8 長野麻子「歌うとは何か？：幼児の歌唱教育における問題点と提言」『立教女学院短期大学紀要』第41号，立教女学院短期大学，2009年，pp.37-50。
- 9 石田久大「新しい歌を教える場合」石井玲子編『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』保育出版社，2009年，p.67。
- 10 滝口圭子・迫田里紗「幼稚園年中児クラスにおける歌唱指導：導入部に見受けられる保育者と子どもとのやり取りから」『金沢大学人間社会学域学校教育実践研究』第38号，金沢大学，2012年，pp.45-57。